ですが、基本的には一番左上の診療所とか、デイサービスとか小規模多機能というところで曜日を決めて看護師として働いています。これは一般的な看護師の働き方かなと思っているのですが、縦軸の政策的に地域で活動するためには何をしているかというと、時々訪問看護をしたりとか、あとは地域包括の生活支援コーディネーターをしたりしています。

これが僕の中ではプライマリーケア領域と言われる部分の活動として整理をしています。一方で、この右側の横軸の個人寄りの部分で、地域で活動するというところでコミュニティナースというものを生かしています。

コミュニティナースってじゃあ何？となったときに、今言われているのが暮らしの身近なところで相手のつぶやきとかを拾って、それに対しておせっかいを焼くような人材だというふうに整理されています。役割は多様なので、100人いれば100通りのおせっかいのやり方がありますよと。ただ、奈良県では分かりやすくするために、医療とか福祉をしている人に、自分の得意なこととか、新たな取組を組み合わせた人をコミュニティナースと整理をしています。なので、僕の場合のコミュニティナースは看護にメダカを組み合わせた活動がそれに当たります。

一方、それでは地域の持続は難しく、どうやって地域を持続発展させることができるかという活動を考えたときに、縦軸の政策寄りでは地域ケア会議とか、行政の計画策定みたいなものを活用しています。

一方で医療とか介護でまちづくりをするというのはちょっと難しく、いろいろな分野との連携が必要だというところで、村では林業がありますので林業と連携したり、観光と連携したり、教育みたいなところで幅広い他分野との連携をしながら地域づくりをしているというのが、今の僕の活動です。

余談ですが、こういった広い活動を、看護を始めたナイチンゲールはしていたと言われています。僕は趣味でメダカを飼育しているのですが、左上（写真）のこれ60リットルのタライが100個ぐらいありますけど、趣味で増やしているだけです。なので、村の人が欲しいと言ったら、無償で分けています。良かったなと思うことが、僕は移住者なのでよそ者です。村というのは血縁関係がやっぱり広いですけど、僕のメダカをあげることは、養子に出すことなので、新たな血縁関係がそこで生まれてくると。しかも村というのは結構年功序列がありました。でも、僕がメダカの先生になることで、その辺りも逆転するとか、あとは普段何か介護を受けているような人が、メダカのお世話をすることでやりがいにつながったりとかします。

いきなり僕が困っている人の家に訪問するとちょっと怪しいのでメダカをあげて、そのメダカの様子を見に行くついでに個別訪問に来ました、みたいな見守り機能を使いました。それもただ見守るだけではなくて、生きているのか生きていないのかの確認だけではなく、最近メダカ死んでいるよねとか、ちょっと水が汚いねみたいなことがあれば、やっぱりうまく育てられなくなったというところでの、何かその生活の継続指標みたいなところで、メダカを飼って生かすというふうなこともしています。

会社は「てとわ」といいますが、「てとわ」の立ち位置ですけどもこれは地域づくりを担うような中間支援団体として位置付けています。コンセプトは暮らす人も訪れる人も日本一癒されるような村づくりです。僕は左側の医療とか、介護の部分で活動する専門職として役割を担っています。

一方で地域に地場産業の分野でも潜在的な専門職がいることが分かってきました。

例えば、陀羅尼助の販売店主若旦那さんが薬剤師を持っているとか、旅館の女将さんが社会福祉士とか看護師であることが分かってきたので、そういった方を法人に迎えて、地域包括と地方創生を組み合わせて、まちづくりをしています。良かったのは、旅館の若女将さんがちょっと旅館が暇なときに地域ケア会議に社会福祉士として参加してくれたり、一方で僕が旅館で働くことで、その産業側の課題を認識することができたりしたのが良かったなと思います。

今、僕が力を入れているものが、主に二つ、観

光と教育になっています。

観光に関しては有志の団体を立ち上げて、村自体のその灯を増やして、笑顔を増やすみたいな取組をし、今やっていることは介護が必要になって旅行を諦めるのではなくて、やっぱり一緒に旅行が行けるような、その新たなツーリズムというのを開発しています。

あと、教育に関しては僕自身の活動を、大学生とか留学生とか、社会人に伝えるみたいなことをしています。これはやはり看護の専門性を、医療とか介護だけで閉じないといった、社会全体の仕組みを変えていくような、何か意識変革というか、マインドが学べるような内容にしています。
また、今奈良県のコミュニティナースの育成事業というところで、今年度の講座募集もしていますし、僕自身の活動にご興味のある方は連絡いただければなと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

▽永田：

はい山端さん、ありがとうございました。

山端さんみたいな人を最近クロス人材なんて呼んだりしますけど、本日お越しの皆さんはそういう方々だと思いますけど、地域の中にクロスしていろいろなことをやってらっしゃるような方々がきっとたくさんいらっしゃって、それは多分皆さんのまちにも同じ人はいないかもしれないですけど、同じような人材もいらっしゃるのではないかな、と思います。ありがとうございました。

メダカの話がもう少し聞きたかったのですが、最近よくあのタッチポイントと言いますよね、接点。メダカというのは、山端さんは一つの接点にしながら、それはもちろん自分の好きなことでもありますけど、それを一つの接点にしながら地域の中に入っているのだろうなと。それはもしかしたら映画だったり、落語だったりするのかもしれないですけど、いろいろなそういう地域の中につながっていくタッチポイントみたいなものがあるのかなということも感じました。

はい、ありがとうございました。

そうしましたらここからはですね、皆さんのお話を受けて、少しそれぞれのお話を深堀りしてい

くような内容にしていきたいと思います。

テーマの一つ目ですが、この共生社会を支えていく、専門職のあり方みたいなことを共通して考えていけるのではないかなと思っています。

今回皆さん、それぞれ医師とか看護師とか、社会福祉士とか、そういった専門職の皆さんですけれども、専門性を高めていく過程でどうしても患者とか、クライアントという形でその方々の一面しか見られなくなってくる。先程、孫先生が自分は腎臓の専門家だったけどというご紹介をしていましたが、腎臓だけ見ているわけではなく、腎臓が悪くなった方というのはその生活も考えていかないといけない、そんな過程でおそらくだんだんと視点を広げてこられたのかなと思っています。

そのような意味で、まず山内さんに聞いてみたいのですが、あのスライドの中で、ご自身の立ち位置というのを専門職として、真ん中に地域住民としてというのを置かれていたと思います。

ご紹介の中でも、弁当屋さんだったりとか、そう思っている地域の人もいるよ、ということをおっしゃっていましたけども、医師であると同時に、カレー屋さんだったり、弁当屋さんだったりすることはその地域で山内さんが実践をしていくにあたって、どういう意味があるのかなということをお聞きしたいと思いましたが、いかがでしょうか。

▽山内：

僕はいろいろなことをやっていますけど、その中でオーガニックの委員をやっていて、佐伯市はオーガニックに力を入れていますけど、その中で漁師さんと友達になりました。皆さん、漁師さんは何の仕事をしているかご存知ですか。お友達で

いませんか。

漁師さんはお魚を捕りますよね。でも何でその人はオーガニックがいいのか最初分からなかった。魚ばっかり取っていたら魚がいなくなります。10年後20年後の仕事ができなくなるから、魚が住む場所を作るのも実は漁師の仕事であって、そういう場所を作ってもやはり川が汚れていたら、魚は育たないので、川を綺麗にする、というところがオーガニックだから、その漁師さんは、10年後20年後の漁師のために、オーガニックをやっている。それを聞いたときに、医療とか介護は何をやっているのか、と考えると、実は来た人とかを見ているだけではなく、その人たちが健康に安全に、楽しく過ごせるようにしていくというのも実は医療の仕事なのかな、と思いました。

僕は医者なので魚が住む場所を作らないけど、人が安心して過ごせる場所を作るのは医療の役割かな、そう考えると職種を超えてやはり10年後20年後の地域を一緒に考えていくという概念が重要で、その中で自分にできることを取り組んでいく。そこで専門職も、患者さんも関係なく一緒にやっていく、一つの目標を持つ、というのがこれからの共生社会づくりに大事なのかなと思っています。

▽永田：

ありがとうございました。

先ほどのお話の中でもとんとんとんの仲間たちというのは本当にいろいろな人たちがごちゃまぜ、そこが力を発揮しているなということは感じましたけど、その点はまた後で、少しお聞きしていきたいなと思います。

山端さんも一つ一つのクロスですけど、本当に何足もわらじを履いている、という印象を持ちましたけど、コミュニティナースとして、とか、地域住民の山端さんとして、とか、メダカの先生としての山端さん、とか、いろいろな顔がきっと地域の中であるだろうなと思いますが、人と人とをつないでいくときにその専門性があるからつないでいける山端さんの力。でも、そうではない部分でつないでいける力もあるのかなと思いますがそのあたりはどうですか。

▽山端：

ありがとうございます。

そもそもコミュニティナースというものとか、あと元々のその専門職をしている看護師というのはあくまでその活動をするための手段なので、コミュニティナースの山端です、という入り方はまずしないです。そのときには「どこどこに住んでいる山端くん」みたいな認識をしてもらうことが大事かなと思っています。ですので、肩書きではなく、個人としてどう認識されているか、その地域で暮らす、ということがすごく大事かなと思っていまして、暮らしながら暮らすことで何か得られるようなつながりとか、あとは一緒に汗を流すこともすごく大事かなというところとか、意識していることは、生活している生活者と、看護師である専門職というのをあまり分けないようにしています。

というのも、白衣を着ているときだけ対応する、ではなく、白衣を脱いでも何か専門的な相談があればきちっと対応する、みたいなことはしていますし、そういうことは特に意識しながら、活動としてやっています。

▽永田：

ありがとうございます。

住民として一緒に暮らしている中で見えてくるその人みたいなものと、専門職として仕事をしながら見ているその人、というのもあるのかなと思いますけど、一緒に汗を流していく中で信頼関係ができてきて、村の中での人間関係みたいなものもあり、そこに移住者として山端さんが入って行きましたけど、そういう外から入ってきた人が逆に動きづらいかな、と思いますが、何かその辺りの苦労はなかったですか。

▽山端：

移住した当初、3ヶ月4ヶ月ぐらいは、僕自身行動が閉鎖的でした。というのも家のカーテンを全部閉め切るとか、ちゃんと玄関に鍵をかけるみたいなことをしていましたが、あるタイミングでつながりができてくるとオープンになっていきました。

オープンにした方が気は楽、というのに気付いた瞬間に、家のカーテンを全部開けっ放しにするし、玄関を開けっ放しで誰でも来てもいいよ、み

たいな状況になるので、その意識が変わってくると血縁関係が深い地域では、意外と活動しやすくなったというのがあります。

▽永田：

ありがとうございました。

いわゆる山端さんはきっと風の人ですよね。でも、その風の人が地域の中ですごく重要な役割を果たしてくれる、という時もあるなと思います。ありがとうございます。

若野さんにもいろいろお聞きしたいなと思っていますけど、若者の居場所づくりや役割づくりとか、若年の認知症の方の役割づくり、ということをずっとされてきたということですけど、私達ソーシャルワークの仲間ですので、何か私達福祉の領域というのはどうしても属性別に縦割りに考えてしまう。それから、残念ながら制度ありきで考えてしまうということがあるかなと思うのですが、そういった地域でのソーシャルワーカーの関わりとか、あり方みたいなところに若野さんは何か思われていることはありますか。

▽若野：

今、永田さんがおっしゃった通りに、子どもは子ども、障がい者は障がい者、高齢は高齢というような考え方でどんどんとスペシャリスト的に僕らも追求というか勉強していくとさらにつながりにくくなるイメージがあります。

もう少しジェネラリスト的というか、横につながれるような仕組みが必要ではないかなというのは思っています。例えばですけど、今の若者たちの話も、もう一つその早期支援というようなところに、制度に当てはまらないところに誰が駆け寄るというと、自分たちの仕事さえしていればいいとなったら行く人がいなくなります。今回、出会った10代から20代の大学生、あるいは2年3年で会社を辞めた若者たちの声を聞いていますと、その段階に専門職が近くにいないです。

10年後、20年後、ご家族が会社を辞めてこうやってひきこもっています、となってから僕らが入りますが、まだ孤立しない、友達がまだ1人2人そばにいるような段階で、僕らがまず出会えたら、もう少し早く対応ができないかな、と話をすると、専門家は忙しくてできない、というときに、先ほど言った企業の方々のところで、ストーリーリーディング的にお話をすると、例えばある飲料メーカーさんが、簡単な情報提供ならうちの飲料を置いているあのお店に置けるよ、とか。だから、地域のそういう居場所を第一次的にというか、予防線というか、どこでも福祉的な情報は取れて、深く相談に入るとなったら僕ら専門家が行ったらいいけれど、その最初の情報提供みたいなものは専門家が、持ってなくてもいいかなとか、就労みたいな、これは最後で言いますと、大学出てから再度インターンシップみたいな職場体験ではなかなかできないです。

1回人間関係でしんどくなっているのに、福祉的就労、中間的就労、ユニバーサル就労みたいな保護的なのも嫌なわけですね。その子が背中を押してもらって、就職に行くための仕組みはどうしたらいいのか、というような考える場所がなかなかないので、そういうところを今後、地域で作っていくためにどうしよう、というのを問題意識として持っております。

▽永田：

ありがとうございました。

社会福祉の領域でも看護の領域でも、さっき山端さんのスライドにナイチンゲーリッシュと書いてあって、内容がすごくいいなと思いましたけど、看護の領域でも福祉の領域でも、すごく専門性が高いと言われていた医療の領域でも、専門性を開いて地域にもっと出て行ったり、地域の人たちのつながりの中でいろいろなことをやっていかないといけなかったり、というような、山内さんの言葉で言うとインフォーマルで、コンパッションな働き方というのが、専門職にも今求められているかな、というのを、皆さんの議論を聞いていて思いました。孫先生は今までの話の中で専門

性に閉じないで、支援する側とされる側だけではない関係性を、地域というフィールドの中で、医療で言えば医師と患者という関係だけではないものが生まれていく可能性があるかな、と思いましたけど、その辺はどうお考えですか。

▽孫：

私の専門が地域医療なので、病院の中だけで完結するわけではなく、地域に出ていくという側面がありますけど、地域の中に出たときに医師の白衣を脱ぐというか、一個人として出て行く接点もありかなと。その時に肩書きで見る部分はありますけど、個人として、私孫大輔です。という、1人の人間として接してくれるところもあり、いろいろな接し方は私達にとっても楽しいというか、またいろいろなことを教えてもらえる。どうしても医師と患者の関係性だけだと限定的と思うので、いろいろな接点とかコミュニケーションの違いとか、そういうのを私達も楽しむということがあってもいいかなと思っています。

▽永田：

ありがとうございます。

最初のテーマとして、専門職のあり方ということを少し考えてきましたけど、今孫さんがまとめていただいたように、患者と医師とか、ワーカーとクライアントとか、専門職と支援を受ける人みたいな関係を固定化してしまうところに大きな今までの問題があり、鎧を脱ぐような場面を意図的に皆さん作られているかな、という感じがしました。

もちろん、その専門性が大事なときもありますし、でも専門性を脱いで接してみたときに、患者としてのAさんとか、何々ができないAさんではなく、地域でこういうことをしている何々さん、昔ナースできっとこんなことをやってくださっていたBさん、というその人の強みとか役割みたいなものが見えてくるかな、と思いました。

こういった皆さんの地域で活躍してくださっている専門職の方々が、もっと地域の中に開いていく働きかけを、是非自治体の皆さんにもしていただきたいな、と思いました。

なかなか皆さん忙しくて、自分の仕事をするだけで精一杯、という人もいらっしゃると思いますけど、例えばメダカ、自分の趣味なわけですよね。なので、例えばそれが地域の人とのタッチポイントになったりする、というのも一つと思いました。

▽永田：

ありがとうございました。

そうしましたら、二つ目のテーマですけど、つながりや文化、そういったものが人を元気にしていく、またそういったものをどうやって作っていけばいいか、つまり、どうやって人とつながっていけばいいか、ということも深掘りしていきたいと思います。

ここは、孫さんからまずお聞きしたいと思いますけど、人とつながることで元気になっていくのは、皆さんがお話してくださったと思いますが、同時に文化というのが、人のウェルビーイングを高めていく、先程、今真似されているという話をしましたけど、だんだん広まっているということですね。そういう文化的処方という考え方もある、ということを教えていただきましたけど、地域に根付いた文化が人をつないでいく力について、もう少し孫先生の方から教えていただきたいと思いました。

▽孫：

医療のゴールも病気の治癒とか予防だけではなく、今度はさらに元気さを支えていくウェルビーイングの方が、医療もゴールの一つになっていくかな、と思っています。ウェルビーイングというときに、その文化的要素はものすごく大事だと思っていて、文化というとアートとか、高尚な文化だけではなく、食文化もそうですし、生活文化ですね。

皆さんが地域生活の中で常に使い、大事にしているものというのは全部文化だと思っています。そういうところを起点にして、地域のつながりづ

くりや居場所づくりは自然かなというところで、谷根千の活動は映画作り、屋台、銭湯でしていました。今鳥取では大山町で活動していますけど、地域にそういう地域文化があり、一つ紹介すると豆腐作りが盛んです。豆腐も手作りで作っているおじいちゃんがいて、もう豆腐が大好きで大好きで、豆腐サミットという豆腐作りの大会みたいなものを開いていたり、豆腐レストランをやってらっしゃるので、そういうところと絡めて暮らしの保健施設であったり、土地土地の文化を大事にしながら、そこを起点に盛り上げていくと、地域の人がすごく元気になると思っています。

▽永田：

ありがとうございました。

別に悪い意味ではないですけど、自治体の職員の方と話をしていると、何かある種の事例知りたい病があって、何かいい事例を教えてくださいとよく言われます。今の孫さんの話を聞いていて、文化みたいなものは他の地域のものではなく、皆さんの地域の中にあるもので、その豆腐屋のおじさんみたいな人は、大山町にはいらっしゃるけど皆さんのまちにはどういう人がいるのか、ということを考えていただいて、あの人と一緒に何か考えてみたらいいか、みたいなものを思い浮かべていただけるといいのかな、と思います。ちなみに銭湯はどういう役割でしたか。

▽孫：

谷根千で活動したときに、銭湯が元々100件ぐらいありましたけど、どんどん潰れてしまい、10件ぐらいしかない。銭湯を「絶対地域にとって大事だ」と言っている方がいて、銭湯の経営者の方とか銭湯ユーザーの方にいろいろインタビューしました。そうすると、銭湯に行くだけでとにかく元気になるし、いろいろな人とコミュニケーションが取れて、いろいろな役割がある。ですので、いろいろな人が緩くつながれる居場所で、銭湯という場所自体が地域のいろいろなものの生態系の一つみたいな感じで大事だ、ということを聞きました。

▽永田：

ありがとうございました。

そういう地域の生態系として捉えたときに、どんな場所が、福祉や医療以外で重要になっているか、という視点も大事ですし、生活の動線上の中にある場所というのは人と人が緩くつながりやすいかもしれないです。ありがとうございました。

山内さんも、先ほどご紹介いただいたように、いろいろ多様な活動を作ってこられて、ごちゃまぜという形でいろいろな人たちが巻き込まれている感じを受けましたけど、人と人がつながっていく、分野を超えてつながっていくためにどんなことが必要かなと感じられていますか。

▽山内：

僕たちがすごく大事にしているのは食、食べるということを大事にしていて、みんな食べないといけないし、美味しいものを食べると笑顔になるし、みんなで地域共生を考えましょう、と言っても人はなかなか集まらないけど、100円で美味しいキーマカレーが食べられるよであれば人が集まってきますよね。お弁当もそうだし、今シェアハウスを始めている、体操もフレイル予防で始めているのですが、フレイル予防で体操しましょうというとなかなか来ないですが、お昼ご飯一緒に食べませんかという中で体操もすることで、食べることをすごく大事にしています。

食べるためには、調理をする人、給仕をする人もいますけど、それだけではなく、例えば食材を提供してくれたり、後片付けをしてくれたり、食べに来て美味しいと言ってくれる人もすごく役割があり、何か食べるということは誰にでもできるし、みんなにとってすごく大事だし、いろいろな関わり方ができる、昨日懇親会で食べたボランティアの方々が作ってくれた地元のおやつ、すごく美味しかったですよね。あれが食べられただけでも本当に来て良かったなと思うので、僕は食かなと思っています。

▽永田：

ありがとうございました。

本当に昨日の食事、美味しかったですよね。食がひとつのタッチポイントにならないか、と思いますね。いろいろあるので、山内先生が食と言っていたので、うちのまちも絶対食をやらないとではなく、皆さんのまちで何が接点になりそうかを考えていただくのが大事だと思いますけど、食は

誰にとっても大事なことですので、そういうものが接点になっていくかなということでした。

若野さんにお聞きしますけど、いろいろな農福連携みたいな分野を越えた、先程企業のお話もありましたけど、福祉の枠を超えていろいろな人とつながっていくときに、若野さんは大事にされていること、苦労されていること、ポイントだなと思っていることがあれば、教えていただけますか。

▽若野：

僕はまずその対話的な部分で、相手の方の活動をしっかり聞く、例えばお寺さんで檀家さんが減っています、みたいな話を聞いて檀家さんを集めてください、と言えば無理ですけど、草刈りぐらいだったらできますとか、調整が可能になることで、できるだけ異文化のコミュニケーションをどうとるかをイメージしています。

もう１つはソーシャルワーカーですので、調整力と言うか、仲が良くて社会的価値が一致しているグループでうまくやるケースもあれば、例えばうちとか最初上手くいきます、メディアもたくさん来ます、いろいろな研究者も来ます、僕らも仲良くやっていました、でもそれは持続的に続いていったり、お金が絡んできたりするとすごく喧嘩になります。来た人は「こんな団体何だろう」と思うぐらい喧嘩します。でもまた喧嘩をした後まとまっていきます、みたいな。僕は喧嘩するときは思いっきり喧嘩しますし、そこで喜怒哀楽を出していいかなと思っています。

でも、途中で帰るとかこれ以上なったら嫌いになるから本日帰りますとか、ある程度の線を決めつつも、活動するところをソーシャルワーカーとしてやっているかなと思います。

▽永田：

やはり対話は本日皆さんのお話の中でもみんな大事かなと思っていて、対話がなかったら活動は生まれてこないけど、そこでどういう対話を作っていくかは、若野さんがおっしゃっていたみたいに、あまり波風立てない対話もあるかもしれないけど、いろいろなスタイルがあり、本質的なところがしっかり議論をしながらとか、いろいろなスタイルがあると思います。そこを専門職としてもしっかり見ながら、対話の機会や場を作っているというお話だと思いました。

山端さんも先程の地域創生とか観光とか、福祉とか医療の分野をどんどん超えていってつながりを作っているかなと思いますけど、山端さん自身がそういうハブになられているような感じもしましたけど、異分野をつないでいくときにそういう役割というのが重要ですか？

▽山端：

そうですね、正にやっていることというか役割は中間支援かなと思っています。

ただ、その中にはいくつか種類があると思っていて、一つはこれまでのやっている当たり前というのをきちっと見直して、作り直す、再構築するというところをしています。

それが例えば、介護とか障がいの計画を作ることを支援するというところで、機能的なハブの役割になっています。

そもそも皆さん見ている方向が一緒か、と言ったら違うことも多くあり、例えばその商売をしている方は、どうやって儲けるか、という考えが先に立ちますけど、福祉側でそういう意識があまりなく、だから儲けるではなくその地域でどうやって儲かるか、その仕組みを考えるというところが大事かなと。そのために、僕が商売側の人と一緒に連携を取ることがすごく彼らにとってのその意識を変えるきっかけにはなると思いますし、今その役割をてとわみたいな団体でやったり、有志の集まりの団体でやったりという集団として、ハブの役割を担ったりしていますし、あとは個人として生活している生活者とか、専門職みたいなところで、その個人のハブとしての役割があると思い、そういう意味でいろいろな場面で様々なハブを使い分けるということをしながら、その地域のつながりを広げることをしています。

▽永田：

ありがとうございました。

皆さんが地域に戻られて、異分野のつながりとかどうやって作っていこうかと考えたときに、今の皆さんのご発言はすごくヒントになるかなと思っていて、そこにハブになる人、もしくは組織、そういうものを中間支援組織と我々は呼んできましたけど、中間支援組織自体も分野の中に閉じてしまう傾向があります。だから、それを広げていけるような視点の持った役割をする人が必要だろうなと。

是非行政の職員の皆さんも、役所の中で自分たちの部署だけに閉じないで、広い視点を持っていただいて、そこをつないでいく役割を、共生とか重層とか担当している皆さんに担っていただきたいなと思います。ありがとうございます。

残り大体 10 分ぐらいになりましたが、他にもいろいろ議論したいことがありますが、皆さん良かったら終わった後に見つけていただいて、名刺交換とかして、深掘りをしていただけたらと思いますけど、ディスカッションは最後の一言みたいなコーナーに移りたいと思います。

今まで、自治体の職員の皆様と話してくる中で、他の地域でできていても、うちのまちではできないとか、良い事例は聞いたけど、こういう人はうちのまちにはいないみたいな感想を持って帰っていただくと、すごく残念だなと思っていて、是非本日ご登壇の皆様からは、最後に皆さんへのメッセージとして、是非地域でこういう発想を持っていただきたいとか、本日参加の皆さんにこういうことを持ち帰っていただきたいというメッセージを一言ずつお願いできればと思います。一、二分ぐらいでまとめていただけると助かります。

▽山内：

本日、おそらく行政の方が多いのかと思いますけど、私も移住者で、2010 年に移住して 14 年間の間、このような活動ができた一番のきっかけは、当時の包括の係長が一本釣りで釣り上げてくれたからです。

活躍できる場を作ってくれて、任意の佐伯市認知症懇話会みたいなものを作ってくれて、そこでいろいろな意見交換、ディスカッションして研修会を企画させてくれました。そのメンバーが今の佐伯市の、いろいろな事業の、いろいろなことを決める部会委員をやっています。我々民間には、すごくやる気のある人がいっぱいいます。

今、医療介護の分野を超えるといろいろな分野の人にすごい人がたくさんいて、今回の生駒の職員はめちゃくちゃすごいなと思いましたけど、でも公務員だけではなく、民間にもすごい人はたくさんいるので、その人たちが是非活躍できる場を作るのは、公務員の役割かなと僕は思っています。そういう方々を是非見つけて、釣り上げて活躍させてあげてほしいなと思います。よろしくお願いします。

▽永田:

ありがとうございました。

それこそ正に行政の方の役割というところで、地域の中のいろいろ素敵な人材を見つけてきて点と点をつないで活躍できる場を作ってほしいというメッセージと思います。ありがとうございました。それでは孫さんお願いします。

▽孫：

私自身が結構いろいろなことをやるのが好きで、映画作りのときは自分で映画学校に通ったりしましたけど、自分一人でいろいろなことをやり過ぎるというよりは、いろいろな才能を持った人たちとつながっていく方がいいと思います。

今、4 年前から鳥取県に移り住んで、新しい場所でまた挑戦しなければ、と思っていましたけど、比較的短い期間で、いろいろな人とつながることができ、その中で人材と言うか、僕は天然資源という方が好きですけど、その土地に生まれ持って、その個性を持った、先程の豆腐づくりのおじいさんとかのように才能を持った方がいらっしゃいます。そういう方がすごく力を持って、そういう

方とどんどんつながってネットワーキングをして、みんなで盛り上げていく、そういうことをやられるといいかなと思っております。

▽永田:

天然資源という言葉はすごくいいですね。人だけではなく、他にもいろいろ地域の天然資源があるかと思いますので、是非皆さんのまちの天然資源を思い浮かべながら、誰かと一緒に来ていたら是非帰りに天然資源の出し合いをしながら帰っていただけるといいかな、と思いました。

孫さん、ありがとうございました。

続きまして若野さん、お願いします。

▽若野：

僕も 20 代は市にいたので、そのときのイメージから言うと、本当に上司、僕を解放してくれ、もっとチャレンジさせてくれ、という感じはありました。

結局、中でやるのが難しいので、だったら外に出てやろうと思ったのと、今度は事業者側になると指導する、される側が変わってきます。そうなったら、うちとは言わないですけど、全国的にいろいろ見ていると、事業者の人は悪だと考えを持っている方々もいて、本当に地域のことを考えているけど、事業者と対話すると駄目だという線引きがあったら、なかなか行政との話は難しく、僕が行政の方とすごく話し合えるのは、自分の子どものパパ会とか、サッカー部のお父さんとかで当然県庁の人も市の人もいらっしゃる、すごく良い話し合いができますけど、自分のまちよりも他の市町村を応援する形になっていくので、まちの中で話し合えるような場ができたらいいな。そのためには僕らだったら認知症の人の就労というようなテーマではなく、奈良の就労困難者のために地域それぞれで考えましょう、自殺対策どうしましょう、とかテーマを広げて、できる限りみんなが自分事に思える形でやっていきたいと思っています。

▽永田:

若野さんありがとうございました。

本日のお話全体を通して思いましたけど、専門職とクライアントと患者とか、行政と事業者とかではなく、人と人とで出会えるような機会とか場みたいなものが地域の中にあるといろいろな話ができ、そこから広がりもできていくかなと思いました。

行政の職員さんとか社協の職員さんとかいろいろな人たちがその地域に住んでおらず、もちろん山内さんのような、そこに住んでつないでいく人もいますけど、私住んでないからできない、ではなく、何か 1 人の個人として人と出会うことも大事なのかなというのは改めて感じました。ありがとうございました。

最後、山端さんお願いします。

▽山端：

どのようなことがその課題の本質なのかはきちんと整理しないといけないなと思っていて、介護保険で説明させていただくと、天川村の介護保険料は今年奈良県で一番高くなりました。

皆さん口を揃えて、その村にはない施設を使っているからという整理をされましたけど、そこで終わらずその先が重要と思っていて、どの施設の給付費が高いのか、なぜそのエリアの施設を利用しているのかをきちんと考えないと駄目だと思いますし、本質はそもそも保険料が高いのに、地域に使えるサービスがないことが問題だということを認識しないといけないなと思っていて、こういうのは車の保険で例えると、高い保険料を支払っているのに事故したけど処理してくれないみたいなことがあったら怒りますよね。

でも介護保険の場合、それを怒る人は少ないです。そういうところは共通認識として整理していかないといけないよとか、他の人がどのような視点を持っているかを実際に体験して知ることが大事だと思っていて、そのためには実際にやるしかない、何が正解かやっぱり分からないので、まずはやってみるということを、いろいろな方にトライしてもらいたいと思います。

▽永田:

もう一つ皆さんのお話を聞いていて割と共通していると思ったのが、自由とか余白みたいなものがすごく大事だろうと思います。

なかなか制度とかに縛られているとルールがあり、こうしなければいけない、もちろん法律もありますから、しっかり守らないといけないのは

もちろんですけど、同時に、人の暮らしを支えていくときに、ギチギチになってしまうとできない部分がどうしてもあって、その部分をどうやってみんなでのりしろを出し合いながらやっていくか、すごく大事かなということを改めて思いました。

ありがとうございました。

そうしましたら、最後残った時間、4分ぐらいでまとめをして終わります。一つは、専門職のあり方みたいなものを皆さんと考えさせていただきました。専門職も、行政の皆さんも、地域に開くことがおそらく大事で、患者と医師とか、専門職とか、行政と住民とか、事業者と行政とか、対立構造ではなく、人と人が出会う関係を地域の中で作っていける。そうすると、支援が必要な○○さんとしてだけではなく、その方々が「○○ができる○○さん」とか、「○○が得意な○○さん」という姿が見えてくるかなと思います。

皆さんももしかしたら、そんな時間ないという方もいらっしゃると思いますけど、そういう風に見ている方の話を聞いたらいいのかなと思います。

地域の中で困った人だと思われていても、この人こんなことやってきた人だよ、この人は昔こうだったよ、こんなこと得意だよと言ってくれる人がいてくれたりします。そういう方から話を聞くのも一つできることではないかなと思います。いずれにしても、患者と利用者ではなく、「○○さんとして見ていく」という視点が大事ではないかな、というのが学びの一つ目です。

それから、二つ目。私達はこれまで他機関協働とか、他職種連携しましょう、ということをやってきましたけど、それだけでは不十分ということです。専門職だけが一生懸命集まって考えても、人の暮らしは支えていけないので、地域の中でいろいろな役割のある方、その中でも天然資源という言葉が出てきましたけど、皆さんの暮らし、地域の天然資源とたくさんつながっていくことが重要で、地域の中にはいろいろなクロス人材の方がいらっしゃると思います。本業をやりつつ、それだったら手伝えるよ、自分にも少し関心があるよ、メダカがタッチポイントになっていた、とかそういう方々とつながっていくことが重要で、他職種連携だけではなく、異業種連携をしていく、地域とつながっていく、分野を超えてつながっていくことが重要だろう。これ、重層で言えば、地域づくりです。それが大事ではないかな、と改めて感じました。

三つ目にどうやってやるの、ということですけど、ヒントとしては、私達はよく「関わりしろ」という言葉を使います。

「関わるためののりしろ」みたいなものを見つけていってつながっていく。タッチポイントという言い方もしましたけど、何かをポイントにしながら、それは食であったり、文化であったり、メダカであったりするかもしれませんが、いろいろなタッチポイントを見つけていき、いろいろな人たちとつながっていくことが大事ではないか。行政が苦手だったら、それが得意な人を是非見つけてください。

そういう境界を越えて、人をつなげていく人材とか、ハブになる人材とか、中間支援の組織とか、そういうものが重要になってくるだろうと思います。

どうでしたでしょうか。分野を超えていろいろな活動されている皆さんの活動をすごく端的にお聞きしたので、消化不良の感じはあるかもしれませんけど、この分科会のテーマが「出番や役割、居場所を作っていく」ということですので、地域の中で困難な状況にある人たち、いろいろな人たちが役割や出番を持って活躍できるというのが地域共生社会の未来と思いますので、そのために、専門職だけではできない、もっといろいろな人たちとつながりながら作っていこう。そういうメッセージでこの分科会を閉じさせていただきたいと思います。

以上で、このパネルディスカッションを終えたいと思いますが、最後に長時間に渡って活発なご議論をいただいたパネリストの皆さんに盛大な拍手でお礼を申し上げたいと思います。

どうもありがとうございました。